

**宮田正志氏** （株）宮田ルームサービス代表取締役


宮田ルームサービスのルームは英語で「LOOM」。つまり、「織機」や「機業」という意味である。タオルの準備工程や製織工程に使う機械類の調達、設置、修理、改造、開発をおこなうだけでなく、タオル製品のサンプルもつくる。扱う機械は古いものから最新までその射程範囲は広い。「困ったときは宮田さん」というのが今治のタオル業界の常識であり、唯一無二の存在である。多くの人たちの協業によって一枚のタオルは完成するが、今回は「裏方仕事」に徹する宮田氏にお話をうかがう。



宮田正志氏



---

みやた・まさし ☆ 1944年9月、愛媛県喜多郡内子町大瀬  生まれ。内子町立大瀬小学校、内子町立大瀬中学校を卒業後、1959年に城南織物(株)に入社。同社にてタオルに関する基礎的な知識を学び、経験を積む。その傍ら、1960年に愛媛県立今治工業高等学校定時制の電気科に入学し、タオル織機の修理・改造に必要な電気の知識を修得。1963年、丸長(株)にヘッドハンティングされ、工場長に就任。その後、繊維関連の機械を販売する越智文商事(株)に移り、機料品店に必要な知識や営業のノウハウを身に付ける。そして、同社と取引のあった商社の協力を得て独立し、1979年宮田ルームサービスを開業(1988年法人化)し、現在に至る。

## 1. 機料品店の仕事

### 機械周辺のことなら何でもやる、便利屋

宮田正志氏の仕事を一言で表現するなら、タオル業界の「便利屋」である。この言葉がしっくりいく理由を、以下で説明していこう。

宮田氏が経営する(株)宮田ルームサービスは、一般的な表現をすると機料品店である。タオル織機などの機械を販売し、その後も修理、メンテナンスなどをおこなうのがおもな業務である。ただ、宮田氏の場合は、単なる機料品店の守備範囲を超えている点で、「便利屋」である。

機料品店を知るうえで、まずタオル織機の種類について予備知識を付けておこう。表1は、緯糸よこいとを通す仕組みによってタオル織機を分類したものである。シャトル（杼）を使う織機は、「力織機」とも呼ばれ、シャトルの左右の往復運動によって緯糸を通す。現在、シャトル織機は数少なくなっているが、今治ではミナトタオルや(株)工房織座のようにシャトル織機を使いつづけているタオル工場もある。

シャトル・レス織機は、文字どおりシャトルを使わず、その代わりにレピア（槍）や、空気または水のジェット噴射によって緯糸を通す。「革新織機」とも呼ばれ、シャトル織機に比べると、生産性が高い。現在、多くのタオル工場ではこのシャトル・レス織機を使っている。








シャトル・レスのレピア織機について付言すると、国内メーカーでは豊和工業(株) 、(株)平岩鉄工所 、(株)岩間織機製作所 、(株)矢原織機製作所 が4大レピア織機メーカーと呼ばれ、海外ではスイスのスルザー社 が日本では広く流通している。その他、エア・ジェットやウォーター・ジェットのジェット織機では、(株)豊田自動織機 や津田駒工業(株) などが多く利用されている。

表1 タオル織機の種類（緯糸を通す仕組みによる分類）

緯糸を通す仕組み	種類	方法	備考	
シャトル	シャトル織機	シャトル(杼)による左右の往復運動によって緯糸を通す伝統的な方法。	「力織機」とも呼ばれ、シャトル・レスの革新織機が登場する以前に広く普及していた織機。	
シャトル・レス	レピア織機	レピア(槍)によって緯糸を通す方法。	シャトル織機よりも高速運動が可能で生産性が高い。シャトル・レスでは、緯糸の通る方向は一方通行に固定されており、左側の端で緯糸は切断されるため、両端に「耳」の部分がない。また、緯糸は織機の左側にチーズに巻かれたままでセットされる。	
	ジェット織機	エア・ジェット		空気の噴射によって緯糸を通す方法。
		ウォーター・ジェット		水の噴射によって緯糸を通す方法。

表2は、<sup>たていと</sup>経糸の開口装置の違いによってタオル織機を分類したものである。タオルは、おもにドビー機とジャカード機のいずれかで製織される。ドビー機とジャカード機は、紋板や紋紙（パンチカード）などを使って経糸の上下運動をコントロールし紋様を出す。技術の進歩とともに、ドビー機の場合は紋板が電子に置き換わり、ジャカード機の場合は紋紙からプロッピー、そしてコンピュータ制御に進化を遂げている。しかし、旧式のシャトル織機の方が密度の高い製品をつくったり、縮みしろを自由に調整して個性豊かな製品をつくったり、技術に柔軟性がある。ただ、現在は紋紙を製作する技術者が激減しており、紋紙に穴を開けるパンチングの作業も宮田氏が請負っている。

ドビー機やジャカード機のメーカーについては、新式では愛知ドビー(株)  や村田機械(株) 、ストーブリ(株)  に人気があり、旧式では地元の今治の(有)村秀鉄工所  が有名である。

表2 タオル織機の種類（開口装置の違いによる分類）

種類	方法・特徴
ドビー機	ドビー装置を使う方法。比較的単純な紋様で小さな模様が反復して織り出される点に特徴がある。ドビー装置は、機構的にはジャカード装置と同じで、紋板にある紋柱の有無によって縦針が上下し、吊ってある綜統が杼道をつくるために上下する。
ジャカード機	ジャカード装置を使う方法。ドビーよりも複雑な紋様が可能。従来は紙に穴を開けた紋紙というカードで、織物の経糸をある規則で上げ下げすることによって柄を作る。1980年代にジャカード装置を電氣的に制御する「電子ジャカード」が登場し、紋紙を使ったジャカード機は徐々に少なくなっていた。

現在、タオルメーカーの多くが導入している織機は「生産性」の高いシャトル・レス織機である。1970年代半ば頃からシャトル・レス織機が流入し、タオルは単価が安いいため生産性の優れた織機が積極的に採用されるようになった。宮田氏の言葉を借りると、「時代の流れで、各タオル工場が回転を速くして数量を織った方が良いという選択をしていった」なかで、今治でも織機の高速化が進行していき、現在に至っている。

その一方で、「柔軟性」に優れているシャトル織機も静かなブームとなっている。「柔軟性」とは、つくりたいものに合わせて機械をいかようにも調整、改造できるという、機械の構造上の特徴を意味している。市場におけるニーズの多様化に素早く対応し商品の差別化を図ることは、競争を勝ち抜くうえで不可欠であるが、これらを実現するためにシャトル織機のもつ「柔軟性」がいま見直されている。難点は、シャトル織機を自由自在に操れる技術は誰でも持ち合わせていないところにあり、専門的な知識と腕と経験を必要とする。そこで、機械の柔軟性を十分に引き出せる「便利屋」の宮田氏の登場である。宮田氏は、上記で挙げたシャトル織機もシャトル・レス織機も機料品店として取扱っているが、とくに旧式のシャトル織機の調整や修理、指導などで引き合いが絶えない。

宮田ルームサービスで販売した織機以外でも、依頼がくれば飛んでいく。飛んでいく先は、織機メーカーにも対応できる技術者がいないため、全国におよぶ。たとえば、ドビー機を設置している織物工場が機械の調子が悪くなって製造元のメーカーに連絡をすると、「四国の宮田さんに言ってください」という返事がメーカーから返ってくる。「メーカーさんがお手上げの場合、織物工場はこっちに言うてくるでしょ。そうだったらそこで修理したあとは指導するんよね。このまえも岡山に行ってきたんですけどね」という具合に、宮田氏は岡山や福井など全国の織物メーカーから連絡を受けると、忙しい合間をぬって赴く。ドビー機はタオル以外の織物にも多く利用されているため、依頼主は全国にいる。

機械のメンテナンスの他にも、タオルメーカーの依頼で商品企画やイメージに合った機械を探して全国を回ったり、ちょうどいい機械が見つかりと製織できるように改造したり、さらに織りのサンプルを作成したりもする。タオルマフラーを例に挙げると、京都の着物の帯をつくる中古の旧式機械を購入し、風合い豊かなタオルマフラーができるように改造した。そして、素材の特徴や製品の形状などを考えながら縮みしろを計算して織機を調整し、いくつかのサンプルもつくった。

タオルマフラーに限らず、タオルメーカーからOKが出るまで何度か試行錯誤を繰り返すが、おおよそ仕事を受けた時点で、糸の通し方や糸を通す順番など仕上げまでの細かな作業手順が頭に浮かぶ。大事なのは、作業途中で何度もタオルメーカーと確認をとりながら、完成形に近づけることである。「面倒やけど、これをやらんといくら自分がこれでええと思っても、お客様のイメージと違った場合は<sup>いち</sup>一からやり直しやからね」と宮田氏。ただし、OKが出たからそれでお仕舞いではない。「よっしゃ、これでええ」というタオルメーカーからゴーサインが出たら、今度はヘム縫いの幅や縮みしろを考えてパイルの数を決定し、サンプルをつくる。これらの一連の作業は、「手間なんていうもんじゃない」と宮田氏が嘆くほど、かなりの時間と労力と根気を要する。こうした宮田氏の暗号を解くに似た陰ながらの作業があって、今治のタオルメーカーは付加価値の高いタオルをつくることができる。

先述したように、機械の柔軟性では、シャトル織機の方がシャトル・レス織機に比べて優位性を発揮する。また、生地の上上がりも風合いが出るのはシャトル織機の方である。宮田氏の言葉を引用すると、「シャトル織機はパイルが切れないね。ゆっくり織るからね。速いのはパイルが尖って三角になる。なじまんのよね。肌触りもソフトで良い。」シャトル織機にはこのようなメリットはあるが、扱いが複雑であり、シャトル織機を用いたジャカード機やドビー機はコンピュータ制御できず、昔ながらの意匠と紋紙を必要とする。いま

では意匠や紋紙を製作する業者も減り、ドビー機用紋紙加工ができるのは今治で宮田氏しかいない。古いものを使い回しする場合は別だが、新しくシャトル織機で商品を企画・製造する場合は宮田氏のような熟達した職人が欠かせない。

しかし、「職人は一日にしてならず」である。宮田氏が人生の時間のどれだけを仕事に費やしてきたかは計りしれない。宮田氏は、何十年もの間、1年365日、機械のことばかり考えている。昔は、頭脳だけでなく身体も365日休まず動いていた。さすがに最近は日曜日を休息日として充電の時間に充てているが、それでも機械のことが頭から離れない。「ああすれば、うまくいくかも。こうすれば、もっと良いものができるかも。」この繰り返しである。「ギフトィッド gifted（天賦の才能を持った人）」とは宮田氏のような人を指すのであろうが、宮田氏はどのような経験をして今に至るのかを次節で見ていく。（次号につづく）

